

住江織物、カーシエア追い風

車内装に抗ウイルス素材

カーペット大手の住江織物は車の内装での抗ウイルス素材の展開を進める。すでにフロアマットで実用化され、シートとの生地での採用も見込む。新型コロナウイルスの感染拡大による衛生意識の高まりに促される。カーシエアリングの普及も見据え、インテリア事業で培ってきた衛生加工の技術を生かす。

このほど、大手自動車メーカーの新型車に住江織物の抗ウイルス素材を使ったフロアマットがオプションで採用された。マット表面の繊維を固定する樹脂に抗ウイルス成分を練り込んだ。同様のマットは今秋から他の複数車種での導入も決まっている。

3月から利用者の衛生意識の高まりに促されたい自動車メーカー各社の問い合わせが急増。抗ウイルス成分の研究を担う技術開発部門と車の内装部門が共同でメーカーへの説明に回る。肌が直接触れるシートの生地や面積が大きい天

井材でも引き合いがあり、「採用に向けて性能評価などの準備を進めている」（事業企画部の寺島琢也部長）。

シートとの生地への抗ウイルス繊維の活用は同社の鉄道部門が先行する。まず来年2月に東京メトロの車両で実装される予定で既に納品を済ませた。価格は通常の生地約1割上乗せする程度で、来春から走行する車両を巡り他の複数の鉄道会社でも採用が決まった。安全性や耐久性の基準は異なるものの「鉄道で実績を積み、車のシートでの採用も加速する」（瀬戸貞弘執行役員）と見る。

中長期的にはカーシエアリングの拡大が追い風となる。調査会社の富士経済（東京・中央）によると、国内のカーシエアの市場規模は2030年には、18年比で約12倍の4555億円となる見込み。住江織物は不特定多数が車を使うケースが増えれば車内を清潔に保つニーズが高まり、抗

ウイルス素材の採用が増える」と見込む。

自動車や鉄道向けに抗ウイルス素材の開発が進んでいるのは、インテリア部門での技術の蓄積が大きい。同社は09年の新型インフルエンザの流行をきっかけに、繊維大手のクラブオと協力しながら病院や老人ホームのカーテンやラグマットでの展開を進めてきた。8月には開発した独自成分が業界団体の抗ウイルス性能の認証を取得した。足元の需要の伸びにも既存の設備の稼働率を上げて対応できるといふ。

同社の20年5月期の連結売上高は前年同期比7%減の915億円だった。特に売上高の約6割を占める自動車や鉄道、バス向けの内装事業で新型コロナの影響が大きかった。今期の収益予想も未定とするなか、抗ウイルス素材を使った内装材が一般化すれば業績の下支え役にもなりそう（荻野聡祐）



カーシエアの普及で抗ウイルス繊維を使ったシートを採用が増えたと見込む

住江織物は抗ウイルス素材を使った製品を増やす

既に製品化	<ul style="list-style-type: none"> ・病院向けカーテン ・長距離バスの仕切りカーテン ・自動車のフロアマット ・ラグマット
展開を予定	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭用カーテン ・鉄道車両のシート ・自動車のシート ・自動車の天井材